

しょうり
正理の海

『中の根本の言葉を章とした知慧（根本中論）』の解説『正理の海』
尊者文殊¹の御足の蓮華へ謹んで礼拝奉る。

それを説かれた事によって、説経師の宝冠であると、
広大な世界の賢者達が大いに称賛した。
「本性が欠如する」が縁起生の意味そのものであると、
説かれる勝者仏陀よ。常に守りたまえ。

その説話は、全ての善説の精髓であるにご覧になり、
貴尊を取り囲む広大な浄土の王子菩薩方を、
深甚な説話によって常に満足させ給う。
尊者智慧の宝蔵（文殊）へ帰依し奉る。

その了義²を、斯様に説かれたことより、
他の様相へと導引する疑問点を、
無量に掲示して、よく批判する。
その仕方は、無上の確信を与える門である。

論式を挙げての証成³と、批判する道において、
異なる、千もの正理道の光を放ったことにより、
辺執⁴の厚い心の闇を破られた、
説経師の太陽である龍樹⁵よ。栄えあれ。

その最高の流派を、正しく良く保持し、

¹文殊菩薩：知慧を司る菩薩、文殊師利。全ての仏陀の智慧の現れであるといわれる。

²了義：聖なる真実を主に示し、言葉通りに認めてよい教えの意味。
これに対して、世俗の真実を主に示すか、言葉通りではなく他の意味に導いて解釈しな
ければならない教えの意味を「未了義」という。仏教哲学派それぞれに「了義」「未了義」
の定義は異なる。

³証成：あるいは「能立」。論式を挙げて主張命題の証明を成すこと。

⁴辺執：常（実在）の極辺か、断（虚無）の極辺を真実であると思込むこと。

⁵龍樹：（150頃～250頃）ナーガールジュナ。古代インドの大乗仏教を確立した学匠。

最高の成就者の教えを長い間明らかにされた、
吉祥なる聖提婆⁶と、勇者⁷等の、
創設者⁸の伝統を保持する方々へ、礼拝し奉る。

星々の中央にある夜の守護者（月）の如く、
全ての（『根本中論』の）解説の中でも際立っている、
最高の得道者である仏護⁹と月称¹⁰の流派を、
思い起こすだけでも、信仰に鳥肌が立ち、身は震える。

その方の御足の蓮華に恭敬することにより、
酷い蒙昧の敵をよく打ち破られ、正理道を明らかにされた、
最良の導引者である上師の優れた御事業により、
これからも輪廻の果てまで、我々を守りたまえ。

了義を探求する多くの善知識¹¹と、
名声が広大な世間に博された方の御言葉に促されて、
深甚な中の道を開示することに、
我が心は喜びを生じる。

「了義」という名称で満足する者や、
大まかな意味だけを見て、足ると思う者や、
心底から成就への志願が生じた時に、
最高の経論を捨て去る者達には必要ないけれども、

善説（経典¹²）の精髓で、般若波羅蜜¹³の意味である了義。

-
- ⁶ 聖提婆：(2~3世紀) アーリヤデーヴァ。古代インド仏教の学匠。龍樹の直弟子。
- ⁷ 勇者：(2~3世紀) 馬鳴菩薩とも呼ばれる。古代インド仏教の学匠。外道の哲学者であったが、聖提婆との論争に敗れ仏教徒となった。
- ⁸ 創設者：龍樹は仏教哲学中 観派の、無着 (310頃~390頃) は唯識派の創設者であるとされる。
- ⁹ 仏護：(470頃~540頃) ブッダパーリタ。古代インド仏教の学匠。
- ¹⁰ 月称：(7世紀) チャンドラキールティ。古代インド仏教の学匠。
- ¹¹ 善知識：仏教学博士。
- ¹² 経典：仏陀の言葉を文字として記したもの。これに対し、仏陀でない者が著した教えを文字として記したものは「論書」と呼ばれる。

瑜伽の自在者が開示されたことによって赴く道。
 不了解や、誤った考察や、疑いの闇の集まりを、
 正しい論理の灯明によって良く掃い、

あり様を見究めた見解によって、
 龍樹のお考えをそのままに修習したいと望む心ある者へ、
 中の根本を、我がよく解説しよう。
 謹んで聴きたまえ。

ここで説かれる教えは、『根本中論』¹⁴であり、それを説くにあたり [序論] と、
 [本論] の二項目がある。

第一項 [序論] に、[真如¹⁵を探究しなければならず、探究する方法]、[論書の著
 者の偉大さ]、[その方の著された論書の構成]、[深甚な教法への確信による効果]、
 [それを説くべき器を示す] の五項目がある。

第一項 [真如を探究しなければならず、探究する方法]

諸々の勝者が布施¹⁶等、他の修行方法を説かれた全ては、真如を了解¹⁷する智慧
 が生じていないものにそれを生じさせ、保ち、さらに向上させる方便である。それ
 は『入菩薩行論』¹⁸で、

「これら一切の支分の教えは、成就者仏陀が般若（智慧）の為に説かれた。

それ故に、苦しみを無くしたい者は智慧を生じさせよ。」¹⁹

と、説かれた如くである。

それ故に仏陀の全教法も、直接的・間接的に真如へと導かれ、その方向へ向かう
 ものばかりであるので、あたかも盲目者の集団を達者な誘導者が彼らの望みの場所

¹³般若波羅蜜：六波羅蜜の一つで、智慧の波羅蜜。智慧の完成。波羅蜜には他に布施・持戒・
 忍辱・精進・禪定の五つある（脚注 108 参照）。

¹⁴ 『根本中論』：龍樹著。空性を説く。

¹⁵ 真如：一切存在の真実のすがた。ここでは空性。

¹⁶ 布施：六波羅蜜の一つ。施し。

¹⁷ 了解：正しく悟ること。認識主体が現前に有るものを直接了解するか、正しい理由を考
 えることによって認識対象に対して揺るがぬ確信を得た時に「了解した」という。

¹⁸ 『入菩薩行論』：寂天（シャーンティデーヴァ。650 頃～750 頃）著。大乘菩薩行の実践
 を説いた論書。

¹⁹ 「これら…させよ。」：『入菩薩行論』第 9 章 1 偈。

へ導くが如く、布施等の行いは修行者を解脱²⁰の都へと導く。縁起生の真如を正しく見る智慧の眼を尽く追い求めることは、知恵を具える者達がなすべき聖なる目的である。

それも、まさしくその意味を示そうと教えを示して詳しく説明されたことや、その説明の仕方においても、所化²¹に応じて了義・未了義²²の多くの異なった門戸から説かれている。

それらにおいて『どれが言葉通りで、どれがそうではないか』と疑問をもつならば、「このように示す教えの意味はそのままに受け取り、他の意味に解釈するべきではない」という、言葉通りの意味については正しい理由のあり方と、それとは他の意味に導くと弊害のあるさまを、正しい論理的考察により（見解の）極辺を斥けて確定されたものに従って探求しなければならないことは、偉大なる創設者全てが口を揃えて説かれた秘訣である。

第二項 [論書の著者の偉大さ]

そのうえで、『聖楞伽経』で

『『各々自認²³の乗²⁴とは、哲学考察者が享受できるものではありません。守護者仏陀が涅槃²⁵へ去られたのち、どなたが保持なさるのでしょうか？教えて下さい。』』

といて、「各々が自らを知る智慧の対象である、言語認識と概念作用の働きが寂滅する²⁶教えの道を、教示者が涅槃へ赴かれたのち何方が保持できましようか」という意味の質問をした返答に、

「如来が涅槃へ去られたのち、諸々の正しい教えを保持するであろう、年月を経て現れる者を、偉大なる知恵を具える君よ、知りなさい。南方のベダという所に、比丘パルデン（吉祥を具える者）と広く知られる者が現れる。その者の名は龍と呼ばれ、実在と虚無の極辺を否定し、私の無上の大乘の教え

²⁰ 解脱：業と煩惱によって生まれ変わる輪廻より、解放され脱出すること。

²¹ 所化：弟子。

²² 未了義：上記脚注 2 参照。

²³ 各々自認：空性を直接悟る各々の禅定の認識する対象である以外、世俗名称や意味の概念に関係せず知覚されるもの。

²⁴ 乗：乗りもの。修行の果へ向かう方法。

²⁵ 涅槃：煩惱が全て滅した境地。「涅槃に去る」「涅槃に入る」といわれる時は、煩惱を滅した者の意識がその身体から離れること。世間一般に「亡くなる」という。

²⁶ 言語認識と概念作用の働きが寂滅する：物事を名称によって識別する「言葉に依拠する意識作用」と、名称に頼らずに物事を識別し考察する「概念作用」が行われなくなる。空性を直接知覚すると主客二元の現れが無くなる。「言葉に依拠して対象を捉える意識作用」と「概念作用」には、常に主体と客体の二元が別に現れる故に、空性を直接知覚する意識が生じると、その二つの作用が停止する。

をこの世間において良く説いたのち、(菩薩の第一地²⁷である) 歡喜地²⁸を得て、極樂淨土²⁹へと生まれ変わるであろう。」

と、実在と虚無の二辺から離れた了義の教えを、龍樹が説明すると説かれた。これは『金光明經』より説かれた、教示者仏陀が存命時に「世間の皆が見れば好きになるリツアの幼子」というまさしくその者が生を得られたのであり、『大雲經』でも

「この若者は、私が涅槃へ去り四百年過ぎたならば、『龍』という名の比丘³⁰となって私の教えを興隆させ、末には『素晴らしく清浄な光』という淨土において、『智慧の根源の光』という名の仏陀となるであろう。」

と説かれた。

所作密教³¹『文殊師利根本儀軌經』においても現れる時期と御名はそれに類似するが、六百年存命されると記されている。

『大法鼓經』では、この「世間の皆が見れば好きになるリツアの幼子」は、仏陀が涅槃へ去り八十年目に教法が衰退した時、教示者の相を保持する比丘となって教えを興隆させ、百年存命して逝き、極樂淨土へ生まれ変わると説かれた。これも、この阿闍梨についての予言であると尊者菩提良と大至尊(アティシヤ)は認められ、「見れば好きになるリツアの幼子」は龍樹と同じ心相続をもつと説かれたことに依拠している。『大法鼓經』でそのように予言されたことは、「その者は南方に現れる」と記されていることから最終的には同一人物であると説かれた故に、「四百年経て南方へ現れる」という第二の現れ方である。

『楞伽經』と『文殊師利根本儀軌經』より、龍樹は菩薩の第一地を得て極樂淨土へ生まれ変わると説かれ、『大法鼓經』ではその比丘龍樹は第七地者であると説かれる。

『大雲經』と『大法鼓經』において、「未来に成仏するであろう」と説かれたことは、欲界³²での応身³³としての成仏の仕方であるので、『顯燈論』³⁴で「無上瑜伽

²⁷ 菩薩の第一地：大乘の修行を行う菩薩が、修行の達成によって得る意識の段階。第十地までである。空性を初めて直接知覚した瞬間に、その菩薩は第一地を得る。

²⁸ 歡喜地：菩薩の第一地の名前。第二地以上のそれぞれの名前は以下、離垢地・發光地・焰慧地・難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地。

²⁹ 極樂淨土：西方にあるといわれる阿彌陀仏の居られる淨土。

³⁰ 比丘：完全な別解脱の戒律(自らが解脱を得る為の戒律)を持つ男性の出家者。

³¹ 所作密教：大乘仏教において四種類ある密教の一種。

³² 欲界：形・音・香・味・触感等、五感の対象に良質を見いだす者のいる世界。他に、禪定の三昧によって到達する形色ある「色界」と、意識だけで形の無い「無色界」がある。

³³ 応身：変化身。大乘仏教で説かれる仏陀の四身の一。仏陀には形ある身(色身)と形の無い身(法身)があり、色身は「報身」と「応身」にわかれ、法身は「智慧法身」と「自性法身」にわかれる。

※次頁脚注に続く

密教³⁵の修行道によって、龍樹はまさしく御存命時に持金剛³⁶（仏陀）の境地を得られた」と説かれたことと矛盾はない。（例えば）教示者釈尊について「百年の寿命を持つ時代に仏陀となるであろう」と説かれたことと、「過去、何劫もの昔から仏陀となっていた」と説かれたことに矛盾が無い³⁷ようにである。

無上瑜伽密教の教えを修する、このように偉大なる方である守護者が、六百年存命しようとも仏陀の境地を得ることができなければ、無上瑜伽密教において「教えを受ける最優良者は一生で持金剛（仏陀）の境地を得る」と説かれるままに承認しようとも、言葉だけのものとなる。然れば、『六十頌如理論註』³⁸より、「この守護者龍樹が為すべきことを完遂しなかった³⁹」と説かれていることは、波羅蜜乘⁴⁰のみの修行道を修された⁴¹、とした場合である。

第三項 [その方の著された論書の構成]

そのようなこの守護者龍樹が、『百方篇』⁴²等共通の学問についての論書と、仏教科目においても真言教と波羅蜜教に基づいた書を多く著された。

了義である奥深い中観の道を、経証⁴³によって示されたのは『大乘宝要集論』⁴⁴

「報身」は成仏を成した瞬間に得る、過去の修行によって成就した仏陀の色身。

「応身」は報身が源となり、変化して現れる色身。

「智慧法身」は仏陀の意識である一切相智（全てのものごとを直覚する智慧）。

「自性法身」は仏陀の一切相智の空性。

³⁴ 『顕灯論』：論書。月称著。

³⁵ 無上瑜伽密教：大乘仏教密教の中に四種ある密教の一種。

³⁶ 持金剛：密教において、本尊としての仏陀の現れの一つ。

³⁷ 例えば教示者釈尊が…矛盾が無い：小乗仏教の教えでは、「釈尊は、人間が百年の寿命を持つ時代に、人としての生で成仏を得た」といわれるが、大乘仏教の教えでは「応身（脚注 33 参照）である釈尊に変化した報身はそれ以前に既に成仏しており、釈尊は人として成仏する等の事業をして見せる為に現れた」といわれる。その二つに矛盾が無いとは、「主にパーリ語経論に依拠する、小乗学派の見解による釈尊像と、主にサンスクリット語経論に依拠する大乘学派の見解による釈尊像に違いはあるけれども、それぞれの学派の主張を照らし合わせて考えれば、異なる釈尊像を述べることに矛盾は無い」ということ。

³⁸ 『六十頌如理論註』：龍樹著『六十頌如理論』についての註釈論書。月称著。

³⁹ 「この守護者…完遂しなかった」：「龍樹がその人生で仏陀の境地を得なかった」ということ。

⁴⁰ 波羅蜜乘：衆生一般の為に顕かに示された顕教の教え。真言乘（密教の乗、密教の教え）に対する。

⁴¹ 波羅蜜乘のみ…修された：無常瑜伽密教においては「優れた修行者は一生で仏陀の境地を得る」といわれることに対し、波羅蜜乘では「仏陀の境地を得るには三阿僧祇劫（計り知れないほど永い時間）分の徳を積まなければならない」といわれる。

⁴² 『百方篇』：薬の調合法等を記した医学論書。龍樹著。

⁴³ 経証：ある主張を証明する典拠。経典、論書等。※次頁脚注に続く

より、『般若十万頌』や『菩薩藏（華嚴經）』等の多くの経典より引用して説かれている。（それを証明する）正しい理論によって示したものは『根本中論』『空七十論』⁴⁵『廻諍論』⁴⁶『六十頌如理論』⁴⁷『細研磨論（ヴァイダルヤ論）』⁴⁸『宝行王正論』⁴⁹で、六書において多くの正理によって決定している。仏陀を賞賛する幾つかの韻文においても空性について記してはいるけれども、正理によって証明したものは、多くはない。

それらの論書も、「実在と虚無の極辺を捨て去った、縁起生の真如」を主に示すものと、「実在と虚無の極辺を見解としない修行道によって、輪廻より解放されること」を主に示しているものの、二種に収められる。

前者（実在と虚無の極辺を捨て去った、縁起生の真如を主に示すもの）に二書ある。事物の自性があると語る者（実在論者）達が、プトガラ（人）⁵⁰と法⁵¹において捏造した、主張命題である「本性」を否定するものが『根本中論』であり、その（主張命題である「本性」を証明する）理由として挙げられた、正しい認識作用⁵²等の因明十六句義⁵³を否定するものが『細研磨論』である。

『根本中論』において、

これに対し、ある主張を証明する正しい論理的考察を「理証」という。

44 『大乘宝要集論』：論書。龍樹著。

45 『空七十論』：論書。龍樹著。

46 『廻諍論』：論書。龍樹著。

47 『六十頌如理論』：論書。龍樹著。

48 『細研磨論（ヴァイダルヤ論）』：論書。龍樹著。

49 『宝行王正論』：論書。龍樹著。

50 プトガラ（人）：補特伽羅。心や体を持つものに名付けられた「者」の総称。仏陀や仏陀以外の天・阿修羅・人・畜生・餓鬼・地獄等全ての者がプトガラである。「人」と漢訳されることも多い。「私」「あなた」「彼」「彼女」等もプトガラである。

51 法：教法の意味ではなく、現象、物事。ここでの意味はプトガラ以外の有。

「空性」「無我」について語る時、否定対象が欠如する基体としての主体を、プトガラと法に分ける。無我は人無我と法無我に分けられる。

中観帰謬論証派においては、二無我の否定対象に違いは無いが、他の学派においては否定対象が異なる。

52 正しい認識作用：物事があることを成立させる正しい認識作用で、「量」と呼ばれる。中観帰謬論証派と他の学派において、定義が異なる。認識主体である「量」に対して、その認識対象は「所量」と呼ばれる。

53 因明十六句義：古代インドの哲学派、ニヤーヤ派が事物の実在を証明するために挙げる十六の言葉と意味。量・所量・疑い・目的（必要性）・喩例・学説・部分・推理・決定・論争・叙述・自らの主張を伴わない単なる批判・誤った理由・言葉・不正確な答弁・誤分別を持っている者、あるいはその者の誤った考えや口述。

「諸事物の本性⁵⁴とは、縁（条件）等に有るのではない。」⁵⁵
と説かれたことに対して、

「もし一切事物の本性が、全て（の事物）に有るのではないならば、君の言葉にも本性は無い。（従って）本性を排斥することはできない。」⁵⁶

という論難への答弁として起こった故に、『廻諍論』は『根本中論』第一章の著述への付随である。この論書は、言葉は（自らを言葉としてあらしめる）本性が欠如することが縁起生の意味であると説き、本性は無くとも、言葉によって主張命題の証明を成すことと、否定対象を斥けることができると説かれた。それによって、無本性を主張する側において量（正しい認識主体）と所量（正しい認識主体の認識対象）による、否定対象の否定と論理的証明の働きも理に適うと示し、本性が実在すると説く者においては、量と所量（の意味や働き）が理に適わない等を示す。

勿論『根本中論』で、「無本性において一切の働きが理に適う」と示してはいるけれども、特別に展開して否定と証成の働きが理に適うと示されたのは、『この派（中観帰謬論証派）において、自らの説を証成する等してはならない』という考えを斥けるためである。

『空七十論』は、『根本中論』第七章より

「夢の如く、幻の如く、ガンダルヴァ（尋香）⁵⁷の都のかくある如く、その如く生と、その如く住（留まること）と、その如く壊（壊れること）を説かれた。」⁵⁸

という言葉へ対する反論への答弁として著されたので、その論述の付随である。

それも、「生住壊の本性を否定したならば、経証（仏陀の言葉）よりそれらを説かれたことは理に適わない」⁵⁹と批判が起こった。しかし『空七十論』で

「住あるいは生・壊は実在するのか、無いのか。低きもの、あるいは同等、または特別なものを、仏陀は世間で使われている名称に基づいて語られた。

⁵⁴ 本性：本当の性質。根本的なありさま。

⁵⁵ 「諸事物…ない。」：『根本中論』第1章3偈。

⁵⁶ 「もしも…ない。」：『廻諍論』第1偈。

上記の『根本中論』の言葉に対して、他派が挙げた論難。「ものごとに本性が無いならば、君の本性を否定する言葉にも『本性を否定する』本性が無い故に、本性を否定することはできない。君の言葉は本性を否定することができないので、本性は有る」という他派の主張となる。

⁵⁷ ガンダルヴァ（^{じんこう}尋香）：香りを食べる者。肉体が無く、香りのみを享受できる者。さまざまな神話がある。死後身体を失い、魂だけになった者をいうこともある。

⁵⁸ 「夢の如く…語られた。」：『根本中論』第7章三34偈。

⁵⁹ 「生住壊の…理に適わない」：「事物に生住滅の本性が無ければ、無と同じなので、事物が生じ、生じたものがその状態に留まり（住）、留まった後に壊れることはない。ならば、仏陀が事物の生と住と滅を説かれたことは、理に適わない」

「真実のあり様に基づいてではない。」⁶⁰

と、生壊等の一切は、仏陀が世間で使われている名称に基づいて説かれたものであるが、真実として成立するあり様に基づいて説かれたものではないと述べられているので、これはその論難への返答である。その論書で、生等における本性の否定を多く説かれた最後に、

「一切の事物は、本性が欠如するので諸々の事物のこの縁起生を、無比の如来が、近しく示された。勝義（聖なる意味）とはそれに尽きる。仏陀出有壊⁶¹が、世間で公認される名称⁶²に従って、様々な一切のものに正しく名称を付けられた。」⁶³

と、事物のあり方の聖なる意味とは、本性が欠如する縁起生、ただそれのみに尽きる所以、生等の一切は世俗名称に基づいて名付けられ、設けられたと説かれた。

『根本中論』より、

「諸仏が教法を示されたことは、二諦⁶⁴に正しく依拠している。」⁶⁵

と説かれたことによっても、本性が欠如することが勝義である⁶⁶ことと、生等は世

⁶⁰ 「住あるいは・・・ない。」：『空七十論』第1偈。

⁶¹ 出有壊（Bhagalana?）仏の称号の一。四魔（煩惱魔等、衆生を悩ます四種の魔）を壊滅されたので「壊」、優れた功德を具えているので「有」、輪廻と寂靜の二つの果てを超えているので「出」。

⁶² 名称：名前。認識のされ方から二つに分けられる。

①音声として発音され、それを聴いた別の者が「名称」と「名称が表す意味」を結び付ける働きをする「音声の名称」と、

②「言葉（名称）」と「言葉（名称）が表すもの、または言葉（名称）を持つもの」の関係性を、思考を通じて把握させる「心の名称」がある。

（例：リンゴである果物は知っているけれども「リンゴ」という名前を知らないAに対して、Bがリンゴを指差して「これはリンゴだ」と言った時、それを聴いたAが『この赤い丸い果物を「リンゴ」という言葉（音声）で言うのだ』と把握した時に①「音声の名称」が成立し、またAが「リンゴ」と「赤い丸い果物」の二つに「名前」と「名前を持つもの」の関係性を把握した時、②「心の名称」が成立する。）

⁶³ 「一切の・・・られた。」：『空七十論』第68・69偈。訳が異なる。

「全ての事物は本性が欠如するので、無比の如来が、この縁起生を、諸事物において近く示された。勝義の意味とはこれに尽き、世間を動かす様々な諸名称の一切を、完全なる仏陀世尊が、真に名付けられた。（シュンヌ・チョク/ダルマ・ダク/ク訳）」

⁶⁴ 二諦：二つの真理。空性を直覚する聖者の智慧の対象が勝義諦。それ以外の有は世俗諦。全ての「有」は、聖なる真理（勝義諦）と世俗の真理（世俗諦）の二に分けられる。勝義諦と世俗諦の意味と例は仏教学派それぞれに異なるが、中観帰謬論証派においては空性と滅諦（苦しみとその原因を滅した聖なる真実。四聖諦の一）の二つを勝義諦、それ以外の「有」は全て世俗諦に分類する。空性が勝義諦であることは全ての大乗学派において同じだが、空性の否定対象は学派それぞれに異なる。一方、小乗の学派は法無我到たる空性を否定する。

⁶⁵ 「諸仏が・・・いる。」：『根本中論』第24章8偈。

⁶⁶ 「本性が・・・である」：中観帰謬論証派の主張。これ以外の学派は全て本性を肯定し、如何なる物事にも本性が有るとする。

俗名称においてであることを勿論示してはいる。しかし前述のように説かなければ、世俗名称として有ることの意味が、名前である世俗的名称の効力によって有ると設けられただけである⁶⁷とは分からない。本性が欠如しないこと⁶⁸に対して正しい論理的な批判を多く示して本性が無いと論証したことで、この様々な一切のものは「名前である世俗的名称の効力によって有る」と示す意味と、その論法において全ての働きが合理であると示すことが分からない。従って、それを了解させる為に『空七十論』を著された。

輪廻より解脱する為には、実在と虚無の辺執見⁶⁹を捨て去る修行道が必要であると、他の二著によって示す。『六十頌如理論』より、

「有（実在）によって解脱することはできず、無（虚無）によってこの輪廻より離れることはできない。」

と、実在と虚無の極みに落ちた者に解脱が無いことを示して、

「事物と無事物を尽く知ることによって、偉大なる御方は解脱された。」⁷⁰

と、事物の有無の真如を誤りなく知ることによって、聖者方は輪廻より解脱されたと説かれた。その二つ（有無）も相互に依拠せずには無いので、自らの本質によって成立した本性が無いこと⁷¹が、それらの真如である。

そこで、「事物⁷²である輪廻と、無事物⁷³である涅槃⁷⁴は有ると説かれたので、その二つに本性が無いとは不合理である」という反論への返答として、「そのように有ると説かれたことは、幼子（世間人）の世俗的な知覚が『有る』と捉える認識の仕方に合わせて説かれたが、聖者が真如をご覧になる知覚面⁷⁵に合わせて説かれた

⁶⁷ 名前…である：一般に名を付けることによって、認識対象として存在する。

⁶⁸ 本性が欠如していないこと：本性が有ること。そう主張する者は、仏教学派の中では中観帰謬派を除く中観自立論証派・唯識派・経量部・説一切有部と、他宗教の学説全て。

⁶⁹ 辺執見：極辺に執着する見解。

常に変化しない実在があると思ひ込む「常見^{じょうけん}」と、ものごとが滅した後には断たれて何も無い、あるいは、存在するものは何も無いと思ひ込む「断見^{だんけん}」の二つがある。

⁷⁰ 「有（実在）…ない。」「事物と…れた。」：『六十頌如理論』第5偈

⁷¹ その二つ…無いこと：「無」に相対して「有」が成立し、「有」に相対して「無」が成立する。「有」が自らの本質として成立するならば、「無」に相対せずとも「有」が成立できる。それは「無」も同様である。従って「有」「無」の二つも常に相互関係して成立するので、各々の本質によって成立した本性は無い。

⁷² 事物：ものごとを成すことができるもの。「有」のうち、変化するもの。

⁷³ 無事物：ものごとを成すことができないもの。変化しないもの。

⁷⁴ 事物である輪廻と無事物である涅槃：輪廻とは原因となる業と煩惱によって生れ変わり、変化するので事物（上記 72 参照）。涅槃とは苦しみが無くなった状態であり、「無くなったこと」は変化することがないので無事物（上記 73 参照）。

⁷⁵ 聖者が真如をご覧になる知覚面：「聖者」とは空性を直接知覚することができる者。空性を直覚している知覚面からは、一切の現象において、本性が欠如していることは同様である。

のではない。輪廻は本性としての生が無いと遍く知る智慧によって、結果を得た⁷⁶時に寂滅（煩惱を離れた静かな境地。涅槃の漢訳）を実現したことを『涅槃を得た』とした。

そのようではなく、自らの定義として成立した⁷⁷『煩惱が尽きること』と『後の蘊が生じない』として涅槃を設けるならば、その涅槃である寂滅を実現することと、煩惱と蘊が尽きることのどれかが不合理となる⁷⁸と否定し、まさしくそれが小乗の涅槃を示す経証の意味である⁷⁹とも説くが、それを論証する支分として、残りの著述をなされた。

要約すれば、阿羅漢地⁸⁰を得た時に「涅槃を得た」、「涅槃を実現した」というその意味において、勝義諦である真如を実現したことが無ければ涅槃を得たことは全く適わないと、小乗の経典自体によって論証すること⁸¹が、主要な意義である。

『宝行王正論』より繁栄（人・天の生）⁸²を得させるものは勝解信⁸³であるが、それを経過することから至福（解脱と一切相智）⁸⁴を得させる智慧の器となる。知

⁷⁶ 輪廻は…を得た：空性を直覚する智慧を修することによって、修行の結果を得る。

⁷⁷ 自らの定義…成立した：他に依拠することなく、自らにおのずと具わっている意義によって存在した

⁷⁸ 自らの…不合理となる：「煩惱が尽きること」と、「後の蘊が生じないこと（再度生まれ変わらないこと）」が自らの定義として成立するならば、何ものにも依拠せず自ら存在するので、以前実現していなかった「寂滅涅槃」が空性を修することによって実現されることや、以前にあった煩惱と蘊が、空性を修することによって尽きることのどれかが不合理となる。

⁷⁹ まさしく…である：小乗仏教の学派はものごとの自相（自らの定義）を肯定し、空性を否定する。それに対し、「解脱・涅槃も自相として成立するならば、解脱・涅槃自体が成立しなくなる」という意味こそが、涅槃について示された小乗仏教の学派でも公認される経典で示された意味である。

⁸⁰ 阿羅漢地^{あらかんち}：一般に、小乗の結果の境地。修行者が自らのみの解脱を得た境地。大乘阿羅漢地とは仏陀の境地を指す。

⁸¹ 阿羅漢…すること：「勝義諦である空性を直接知覚する智慧を修習しなければ、解脱を得ることはできない」と、小乗仏教の学派でも公認される経典を引用することによって、論理的に証明すること。

⁸² 繁栄（人・天の生）：六道輪廻^{ろくどうりんね}（六種類ある輪廻）の生のうち、善趣^{ぜんしゅ}（苦しみが少ないよい生まれ）である人・天（神）に生まれること。阿修羅は人界より上に有り、天と戦うので善趣に属する。

六道輪廻とは、地獄^{じごく}・餓鬼^{がき}・畜生^{ちくじょう}（動物）・人^{ひと}・阿修羅^{あしゅら}・天^{てん}の何れかに生まれること。そのうち地獄・餓鬼・畜生の三つは多大な苦しみを経験するので「悪趣^{あくしゅ}」と呼ばれる。

⁸³ 勝解信^{しょうげしん}：信じる信仰心。三種類の「信（信仰心）」の一。三種類の信とは、「信仰の対象が素晴らしいと思う信仰心（清浄信^{せいじょうしん}）」、「信仰の対象を強く信じる信仰心（勝解信）」、「信仰の対象のように自分もなりたと思う信仰心（現求信^{げんきゅうしん}）」の三つ。

⁸⁴ 至福（解脱と一切相智）：小乗仏教において成就すべき解脱と、大乘仏教において成就すべき仏陀の境地。「一切相智」とは、仏陀の智慧（脚注 33 参照）。

慧とは、我⁸⁵と我所⁸⁶の二つは勝義として無いと知るものであるが⁸⁷、それに依拠して蘊⁸⁸が真実として無いと知るならば、人我執⁸⁹が尽きるであろう⁹⁰。また蘊への諦執⁹¹が尽きぬうちは輪廻が退かず、尽きれば退ける⁹²。そして断見⁹³によって悪趣⁹⁴（地獄・餓鬼・畜生）へ⁹⁵、常見⁹⁶によって善趣⁹⁷（人・天）へと輪廻転生する⁹⁸の

-
- 85 我：「私」。一般の知覚で認識される「我」。
「人無我」の「我（否定対象）」は、自らの性質として存在している「私」そのもの。一般に「無我」の否定対象としての「我」は、「自らの性質として存在しているもの」。
- 86 我所：「私のもの」。我々が自らの心身の一部を認識した時に感じる「私に属する」という性質。「我所」も人無我の否定対象に含まれる。
自らの性質として存在する「私に属するもの（目耳鼻身体等）」は「我所（私に属する性質）」ではないので、法無我の否定対象となる。
- 87 智慧とは・・・であるが、：小乗仏教において成就すべき解脱と、大乘仏教において成就すべき仏陀の一切相智（脚注 33 参照）を得る主要な原因である智慧とは、我と我所が聖なる真実として無いと（我と我所における空性を）知る智慧である。
- 88 蘊：「集積」の意味。輪廻に生まれる時に具わる、物質や知覚・心理作用等の集まり。人間には五蘊が具わる。
五蘊とは色蘊（姿かたちの集積）・受蘊（感受作用の集積）・想蘊（識別作用の集積）・行蘊（人の心と体に属する、他の四蘊以外のものの集積。行動や受・想以外の心理作用等もこれに含まれる。）・識蘊（知覚作用のうち主体となる知覚の集積）の五つ。
欲界・色界（脚注 32 参照）に生まれた者には五蘊全てが具わり、無色界（脚注 32 参照）に生まれた者には形が無い為、色蘊を除く四蘊が具わる。
- 89 我執：我に執着する心。人我執と法我執の二つがある。「人」とはプトガラ（脚注 50 参照）を示し、「法」とはプトガラ以外の現象（脚注 51 参照）を示す。
我執は、プトガラと法が他に依ることなく自らの本性として存在すると思込んでいる心。中観帰謬派においては、人我執と法我執の二つは、我執の対象が「人」と「法」に異なるのみで、その様相（捉え方）は同じであるとする。中観自立派・唯識派は、我執の対象が異なるだけでなくその様相も異なるとし、小乗の学派は、「我執」を人我執のみであるとする。
- 90 それに・・・あろう。：我と我所の空性（人無我）を知る智慧によって、我と我所が認識される拠所となっている蘊における空性（法無我）を知るならば、「人無我」と正反対の様相に執っている「人我執」が完全に無くなるであろう。
- 91 諦執：「諦」とは真実。何ものかを真実として存在すると思込む心。中観帰謬派では「我執」と同義。それ以外の学派では異義。
- 92 蘊への・・・退ける。：「私」を認識する拠所となっている「体や心等の集まり」に対する「我執」が無くならなければ、輪廻の苦しみから離れること（解脱）はできず、「体や心等の集まり」に対する「我執」が無くなれば、輪廻から解脱することができる。
- 93 断見：辺執見の一つ（脚注 69 参照）。虚無見。ここでは「人は死んだ後全て滅す。来世もない。」と見る見解。
- 94 悪趣：六道輪廻の一部（脚注 82 参照）。
- 95 断見・・・悪趣へ、：「ものごと」または「来世」があると信じないので因果（ある行為によってその結果を経験する）も信じられず、悪い行いをしてても悪い結果を経験することは無いと考え思うままに悪業を成し、その結果として悪趣へ生まれる。

で、その二つから逃れる為に実在と虚無の二極辺に依らない正しい意味を知らなければならぬ。そしてその意味とは、プトガラ（人等）は六大構成要素⁹⁹が集まったものに名付けられたものである故に、それら（の構成要素）と同一と別の如何とも成立していないので、真正として成立していないけれど、¹⁰⁰そのように根¹⁰¹（知

⁹⁶ 常見^{じょうけん}：辺執見の一つ（脚注 69 参照）。実在視。ここでは「人は死んだ後も変化せず存続し、来世を得る。」と見る見解。

⁹⁷ 善趣^{ぜんしゆ}：六道輪廻の一部（脚注 82 参照）。

⁹⁸ 常見…させる：自分が死んだ後も来世は本当に存在し、現在の善い行いは来世の幸せに必ずつながると考えて善業を積み、その結果として善趣へ生まれる。しかし、「我が真実として存在すると執着する心」を動機として具えているので、悪趣へ生まれようと善趣へ生まれようと、輪廻の苦しみの中である。

⁹⁹ 六大構成要素^{ろくだいこうせいようそ}：地・水・火・風・虚空・識^{ち すい か ふう こくう しき}の六。これら六つの集まりに依拠して「人」「犬」「猫」等の「プトガラ」が名付けられる。「地」は固い要素（ここでは肉・骨・髪・爪等）。「水」は湿潤の要素（血・体液等）。「火」は熱の要素（体温等）。「風」は空気が流れる要素（呼吸等）。「虚空」は空間の要素（臓器中や口中の空間等）。「識」は知覚作用の主となる要素（眼・耳・鼻・舌・身体^の知覚器官による五感の知覚作用と、心の意識作用の六種類）。

¹⁰⁰ プトガラ…しない。：もし「人」等のプトガラが我々自身に映っているように「真実」として成立するならば、「真実」は何時・何処で・どのような状態においても変わることが無いので、如何なる知覚が分析しようとも変わらず「真実」として成立しなければならぬ。一方、ある知覚によって吟味分析した時に、その対象が当初の様相とは違って認識されるようであれば、それは「真実」として成立しているのではない。

例えば「人である私」は、自分の心身を経験することによって、「私」を感じる。

ならば、「私」を「私である」と感じるように、「私の身体（地水火風虚空の要素それぞれと全ての集合）」を「私である」と感じるか？「私の心（識）」を「私である」と感じるか？と、身体と心を基において「私であるかどうか」を吟味する。

それらが「私」を感じる時と全く同じように感じられず、「私のもの」として感じるならば、「私の身体と心」は、最初感じていた本当の「私」ではないということになる。

「心（識）」が「私」であると思う人は、「識」には六種類（脚注 98 参照）あるので、「見ている私」「聞いている私」「嗅いでいる私」「味わっている私」「（身体感覚を）感じている私」「考えている私」と、六種類の「私」をそれぞれ確認する。六種の「識」はそれぞれ違うものなので、「見ている私」等が本当に「私」であるならば、本当の「私」が六種別々に感じられる筈であるが、単一の「私」が全てを経験するように感じられる。ならば、以前感じていた「見ている私」等は、真実として（本当に）有るのではない。

更に「意識」が本当の「私」であると感じられるならば、心は「眼覚めている心」「夢を見ている心」「深く眠っている心」と幾つかに分けられる。そのうち本当の「私」はどれか？と考える。一瞬一瞬変化する意識（実際に経験している意識）を一瞬ごとに捉えることはできない。意識を捉えることができないので、「私」を捉えることもできない。

あるいはもしもそれらの一つが本当の「私」であるとすれば、他は「私」ではなくなる。全てが本当の「私」であるとすれば、心の数だけ「私」がある筈である。また、一瞬前の知覚である「私」は今の私と別であり、意識のように一瞬毎に変化すると感じる事が続く筈である。しかし「私」別人に変化するとは感じられない。ならば、以前「意識」が本当の「私」であると感じられたことは、真実ではないということになる。

※次頁脚注に続く

覚器官) と蘊についても考察しなさい。」と説かれた。

本論 (『宝行王正論』) と前二論でも、プトガラと法において本性を否定した縁起生の真如を示した著述は勿論多いが、「二極辺に依らない正しい意味を知ることが、輪廻より解脱する修行道に確実に必要である。」と、主にそれを論証する支分であるように映る。『根本中論』と『空七十論』よりも、真如を了解する修行道によって無知¹⁰²が退き、それから残りの支分の一切¹⁰³が退くと、勿論説かれてはいるけれども、認識対象である縁起生の真如を決定したことが主要と映り、それを了解する認識主体が解脱の因であると論証することは、著述内容の根幹であると映らない。(これは) 前者の論証がより困難であると考えられたのである。

それらの意味を要約すれば、『根本中論』と『細研磨論』によって、対論者の主張命題と理由を詳細に批判して縁起生の真如を示したならば、『そのように否定することは、その学派においても否定と論証の働きは理に適わないので、他説を否定し自説を論証することは存在しなくなる。』という考えに対し、自説にはそれら一切の働きが合理であると『廻諍論』が示した。

そのように、否定と論証の働きによって決定した意味である「自らの本質によって成立していない縁起生」そのものが勝義である故に、この様々な一切のものは名前である世俗的名称の効力によって有ると設けたことが「世俗として有る」の意味であると『空七十論』で示したことで、ただ名前として名付けられただけの世俗名称の意味において、全ての働きが理に適うと了解するのである。

「二諦¹⁰⁴のありさまをそのように理解することは、仏陀の境地を得る為には言うまでもなく、輪廻より解放される為にも無ければならないものである。」と、他の

また、それぞれの構成要素が「私」でないならば、それらが集まったものも「私」にはならない。「無」がいくつ集まっても「有」にはならない故である。

では、「私の体と心」とは別に「私」があるのか? と考えれば、「私の体と心」が無い所で、「私」を感じることは無い(「私」を経験する心が無ければ「私」を感じることはできない)。

従って、「人(私)」はそれらの構成要素と同一か、別か、如何とも成立することが無いので、真実としては成立しない。真実として成立するならば、それらの構成要素と同一か、別か、どちらかとして成立しなければならない故である。

¹⁰¹ 根：身体に属する感覚器官と、意識の知覚器官。形色を知覚する拠所となる眼根・音声を知覚する拠所となる耳根・香りを知覚する拠所となる鼻根・味を知覚する拠所となる舌根・触感を知覚する拠所となる身根の五根と、意で六根ある。

¹⁰² 無知：「ものごとの真実のあり様を知らない」という心理作用。「ものごとの真実のあり様を知覚しない」状態とは異なる。

¹⁰³ 残りの支分の一切：「ものごとの真実のあり様を知る」知慧を修することによって無知が無くなった後も残っている、「ものごとの真実のあり様を知らぬ無知」を原因として起こったもの。ものごとの真実のあり様を知らない心の習慣や、無知から起こった執着や怒り等の癖や、それを動機としてなされた行為(業)の力等。

¹⁰⁴ 二諦：二つの真理(脚注 64 参照)。

二論によって示す。

さればこの偉大なる御方によって、大乘小乗へ入門する全ての者へ修行道の命心を見る眼がもたらされたので、大変恩深い方である。

それらの中で最高のものは、『根本中論』である。(何故ならば) 異なった果てしない正理の門戸を示して、深甚なる意味に確信を打ち立てる故である。

第四項 [深甚な教法への確信による効果]

そのような深甚な教法への確信を非常に称賛され、『大乘宝要集論』より、

「深甚な教法を確信することによって一切の福德を集め、仏陀の境地を得るまで世間と出世間¹⁰⁵の一切の円満を成就するとなり、『宝童子が授けた経』より明示される。

『文殊よ。方便¹⁰⁶に長けていない菩薩が百千劫¹⁰⁷と六波羅蜜¹⁰⁸を行ずるより、ある者がこの教法の類を、疑いを持ちながら聴聞することの方が、それより遥かに多くの福德を生じさせるならば、疑い無くして聴聞する者は言うまでもない。文字に記して口伝を授け、保持し、他者へも広く開示する者は言うまでもない。』と説かれている。

『金剛能断般若波羅蜜経』からも、『世尊が御言葉を給われた。「須菩提¹⁰⁹よ、これをどう思う？恒河¹¹⁰の砂の数ほどに恒河もあるとなれば、それらの砂は更に多いであろうか？」須菩提が申し上げた。「世尊よ。恒河にある砂だけでも多いのですから、それらの砂 (になったものが多いこと) は言うまでもありません。」

世尊が御言葉を給われた。「須菩提よ、お前に説こう。お前は理解しなさい。それらの恒河の砂の数ほどの世間界を幾らかの男女が七種の宝物でいっぱいにして如来へ布施を捧げたならば、その男女は、その(善行の) 拠所から多くの福德を生じさせるであろうか？」須菩提が申し上げた。「世尊よ、

¹⁰⁵ 世間と出世間：瞬間ごとに壊れるものに拠所を求める一般の世界を世間という。瞬間毎に壊れるものに依拠せず、それを超越したものを出世間という。解脱や仏陀の智慧等。

¹⁰⁶ 方便：ものごとを成し遂げる為の巧みな手段。空性を修する智慧に対して、それ以外の修行道にあてる。

¹⁰⁷ 劫：きわめて長い時間の単位。「百千劫」とは、「途轍もなく長い間」という意味。

¹⁰⁸ 六波羅蜜：菩薩が仏陀の境地を達成する為に行う六種類の修行道。完全な波羅蜜は仏陀に具わる。布施波羅蜜(脚注 16 参照)・持戒波羅蜜(戒律をそれぞれよく守ること)・忍辱波羅蜜(怒り等を起こさぬように、また修行の苦難等に耐えること)・精進波羅蜜(善に勤しむこと)・禪定波羅蜜(禪定をして心を安定させること)・般若波羅蜜(脚注 13 参照)の六つ。

¹⁰⁹ 須菩提：菩薩の名。ここでは、世尊と須菩提菩薩の質疑応答で話が進む。

¹¹⁰ 恒河：ガンジス川。

多いです。善逝¹¹¹よ、多いです。」世尊が御言葉を給われた。「ある者がこの教法の類より、僅か四語の句のみを保持して、他者へも示したならば、それよりもずっと多くの福德を生じさせるのである。』と説かれた。」

また、『如来藏経』より、程度の重い十不善業¹¹²を数えあげて

「それらを具える者が、無我の教法へ入門し、一切の法（現象）は原初より清浄であると信仰し、確信する有情は、悪趣へと落ちない。」

と説かれたことや、『降魔品』より、

「ある比丘が、一切法はまことに穏やかであると知り、諸々の罪過の始まりの果ても本性が離れていると知り、罪過が起こった悔恨の念を掃い、確執としないことによって無間業¹¹³をも抑えるならば、儀軌¹¹⁴や律儀¹¹⁵を誤って行った些細なものは言うまでもない。」

と説かれたことや、『阿闍世王経』より、

「無間業を犯す者がこの聖なる教法を聴き、入門し、確信するならば、その者の業は業の障り¹¹⁶であると、私は言わない。」

と諸々に説かれたことは、阿闍梨龍樹が引用された如くである。

第五項 [それを説くべき器を示す]

深甚な空性の説話を聴聞したとしても、ある者は信じることなく捨て去り悪趣へ落ち¹¹⁷、他の者は確信をしても「『本性として空である』意味とは何も無いことで

111 善逝^{ぜんぜい}：仏陀^{ぶつ}十号^{じゅうごう}（仏に対する十種の称号）の一。仏十号とは、如来^{にょらい}・応供^{おうぐ}・正遍知^{しょうへんち}・明行足^{みょうぎょうそく}・善逝^{ぜんぜい}・世間解^{せけんげ}・無上師^{むじょうし}・調御丈夫^{ちようごじょうぶ}・天人師^{てんにんし}・仏世尊^{ぶつせそん}の十。

112 十不善業^{じゅうふぜんごう}：十悪^{じゅうあく}と同じ。十種の善くない身口意の働き。これらの結果として苦しみが起こる為、不善・悪と呼ばれる。十悪とは、殺生^{せつしよう}（生き物を殺すこと）・偷盗^{ちゆうとう}（盗むこと）・邪婬^{じゃいん}（性的に邪な行動）・妄語^{もうご}（嘘）・綺語^{きご}（無駄口）・悪口^{あくこう}（他者を傷つける言葉）・両舌^{りょうぜつ}（仲の良い他者を引き離す中傷）・貪欲^{どんよく}（他者の所有するものを強く得たいと欲す欲望）・瞋恚^{しんに}（他者を傷つけたいと思う心）・邪見^{じゃけん}（因果応報や前世来世、帰依の対象である仏法僧が無いと考える見解）の十。これらのうち前の三は体（身）の、中の四は言葉（口）の、後の三は心（意）の悪業である。

113 無間業^{むけんごう}：五逆罪^{ごぎやくざい}と同じ。大変重い罪。犯すと、死後間を置かずに地獄に生まれる業。五逆罪とは、父・母・阿羅漢^{あらかん}（解脱を得た者）を殺すこと、僧団の和合をこわすこと、仏の体を傷つけて血を流すことの五つ。

114 儀軌^{ぎき}：儀礼・行法等を行うときの儀範、規則。

115 律儀^{りつぎ}：心身を治め、善業を行うこと。また禁戒を守ること。

116 障り^{さわり}：修行道の結果を得ることの妨げとなるもの。障碍^{しやうげ}ともいう。解脱を得る妨げとなる煩惱の障り・仏陀の全智を得る妨げとなる所知^{しよち}（知覚の対象）の障り等がある。

117 信じることなく…悪趣へ落ち：空性を説いた教法を捨て去る故に、「教法を捨てる業」を犯して六道輪廻（脚注 82 参照）のうち苦しみの多い悪趣へ落ちる。

ある」と誤って捉え、有るものを無いと誹謗する。それ故に、教示者は確信（した者）の特徴をはっきりと知り、説きたまえ。

それを如何なる様相から知るかといえ、『入中論』より、

「凡夫¹¹⁸の時であろうとも、空性について聴聞して、心中に歓喜が再々起こる。歓喜より起こった涙が目に溢れ、身の毛が逆立つ者。その者に完全なる仏陀の心の種子がある。真如を近しく示すべき器とはその者であり、その者へ聖なる意味の真実を示したまえ。その者にはそれに随従する功德が起こる」¹¹⁹

と三つの印を説かれた。その者には前述の二つの過失が無いだけではなく、聴聞者の諸々の功德も起こる。このように、その者は空性の見解を聴聞することに宝物を見つけたように喜び、その見解が他の転生のいても衰えない方法を考える。『私は持戒¹²⁰が衰えたことによって悪趣へ落ちれば、空性の見解が途切れてしまう。』と思ひ、律の戒を正しく受け、受戒してからも尽く清浄に保つ。『持戒によって善趣へ生まれようとも、貧しくは衣食等を探すことに気が散って、空性について続けて聴聞することはできないだろう。』と考えて布施をする。『大慈悲心¹²¹を経た空性の見解によって成仏を得るだろうが、それと離れては得られない』と考えて慈悲の修習に習熟する。『怒りが起これば悪趣へ落ち、善趣へ生まれようとも酷く不快な姿となるせいで聖者方がお好みにならないであろう。』と考えて、忍辱¹²²の教誨を修習する。持戒等を一切相智の為に尽く廻向¹²³することによって、まさしく成仏を得るであろうことと、量り知れぬ果が絶えることなく生じると見て、衆生¹²⁴の為に菩提¹²⁵を得る為に、諸々の大いなる善業の廻向を行う。縁起生を如実に示すことにおいては菩薩方が主要であると見て、彼らを敬ひ、『入中論』より、

「常に律持を清浄に受けて留まるとなる。布施を施し、慈悲を修行する。忍辱を修習しその善を菩提へと、衆生が解き放たれる為に尽く廻向する。完全な菩薩方をも敬う。」¹²⁶

と説かれた。

空性についての理解が的を射ていれば、そのような理解の仕方となるが、正理が

118 凡夫^{ほんぶ}：空性を直接知覚したことの無いもの。

119 「凡夫…起こる。」：『入中論』第6章4・5偈。

120 持戒^{じかい}：六波羅蜜（脚注108参照）の一。

121 大慈悲心^{だいじひしん}：一切有情（全ての心を持つ者）を苦しみから助け出したいという情愛。「大」を付けると対象が一切有情となる。

122 忍辱^{にんにく}：六波羅蜜（脚注108参照）の一つ。

123 廻向^{えこう}：行った善行を、望む結果を得る為に祈り捧げること。

124 衆生^{しゅじょう}：輪廻の中を生まれ変わる者。または仏陀ではない者。

125 菩提^{ぼだい}：ここでは仏陀の境地。

126 「常に…敬う。」：『入中論』第6章6偈・7偈1行目。

一切の因果¹²⁷を否定したと受け取れば、誤解が無くなるまで、その面立ちで欺瞞は無いと言ったとしても縁起生への確固とした確信は起こりようが無いので、聴聞者としての良質が無いだけでなく、諸々の過失が起こるのである。

然れば、因果の縁起生への確信を害さない状態で深甚なる経論を聴聞し保持することと、意味を思惟すること、修習すること、全ての転生において確信することができるように、祈りたまえ。

DECHEN 訳

¹²⁷ 因果^{いんが}：原因と結果。ある原因によってしかるべき結果が起こること。

因果応報の因果は、他を幸せにしようとする動機をもって善い行いをすることによって幸せがもたらされ、他を害そうとする動機をもって悪い行いをするによって苦しみが起こること。